

シラミ類の類縁関係からみた霊長類の系統と進化

金子清俊(愛知医大)

昭和58年度と59年度の2年間に調査した霊長類は9科25属41種、202体であり、そのうち17種にシラミの寄生がみられた。採集されたシラミ類はスライド封入標本として同定した結果、ハジラミ目 Mallophaga に属するものが2亜科2属2種でシラミ目 Anoplura に属するものが2科2属7種であった。シラミ類とそれらの宿主との関係は下記に示す通りである。

I ハジラミ目 Mallophaga

ナガケモノハジラミ科 Gyropidae

1) *Aotiella aotophilus* Ewing, 1924

宿主: ヨザル

ケモノハジラミ科 Trichodectidae

2) *Lorisicold mjobergi* Stobbe, 1913

宿主: スローロリス

II シラミ目 Anoplura

サルシラミ科 Pedicidae

1) *Pedicinus ancoratus* Ferris, 1934

宿主: マンドリル

2) *P. eurygaster* Burmeister, 1838

宿主: カニクイザル, アカゲザル, ニホンザル

3) *P. hamadryas* Mjöberg, 1910

宿主: マントヒヒ, ゲラダヒヒ

4) *P. obtusus* Rudow, 1869

宿主: サバンナモンキー, ボンネットモンキー, ブタオザル, カニクイザル, ニホンザル

5) *P. patas* Fahrenholz, 1916

宿主: グエノン, ショウハナジログエノン, パタスモンキー

ヒトシラミ科 Pediculidae

1) *Pediculus mjobergi* Ferris, 1916

宿主: クロテクモザル, シロテテナガザル

2) *P. schaffi* Fahrenholz, 1910

宿主: チンパンジー

以上の如く、異った地域に生息する霊長類に、それぞれ共通したシラミが寄生しているということは、現在でこそ種を異にして異った場所に生息するが、その類縁関係はきわめて近く、もとは共通の祖先をもつことが示唆される。Ewing (1925)

によればクモザル寄生のシラミは古い時代にヒトから移行したといわれている。

霊長類の種特異性に関する法医免疫学的研究

堤 肇・伊藤弘行・青木 稔・佐藤元嗣
(愛知県警・科捜研)・中村 伸*(京大・霊長研)

*共同実験者

霊長類の系統関係および霊長類血液試料の人の獣鑑別法を確立する目的で研究を進めている。今回は抗チンパンジー血清、抗ニホンザル血清、抗マンドリル血清、抗フサオマキザル血清および抗ワタボウシタマリン血清を作成した。これらの抗血清を使用して免疫拡散法と間接凝集阻止試験法により、霊長類血漿タンパク質の抗原性を比較検討した。両方法から得られた結果をまとめると、以下のとおりであった。

(1) 抗チンパンジー血清に対する反応から、チンパンジーとの近縁性はヒト、オランウータン、ギボンの順であった。なお、オランウータンとギボンとの間には極めて顕著な抗原性の違いがあった。(2) 抗ニホンザル血清に対する反応から、ニホンザルを含むマカク類間では極めて近縁な関係がみられた。次いで、グエノン類(パタスモンキー, サバンナモンキー), ヒヒ類(マントヒヒ, ゲラダヒヒ)およびマンドリル類(マンドリル, ドリル)の順で類縁性がみられた。ただし、グエノン類とヒヒ類・マンドリル類との間の違いはわずかであった。(3) 抗マンドリル血清に対する反応から、マンドリルに最も近縁な種はドリルであった。かなり離れて、ヒヒ類, グエノン類およびマカク類との類縁性がみられた。従って、ヒヒ類とマンドリル類との近縁性については支持されなかった。(4) 抗フサオマキザル血清に対する反応から、フサオマキザルに近縁な種はノドジロオマキザルであった。なお、興味深いのは、上述の旧世界ザル(オナガザル亜科)の場合と違って、新世界ザル(オマキザル科)では属間レベルでの抗原性の類似がみられなかったことである。(5) 抗ワタボウシタマリン血清に対する反応から、タマリン類に近縁な種はマーモセット類(コモンマーモセット)であった。

今回、霊長類血漿タンパク質の抗原特異性を免